

→薩摩藩伏見屋敷と島津家ゆかりの人

2018. 2. 11(日) カルチャーウォーキング

関西文学散歩 第 531 回 参加報告

濠川の川沿いを歩くころからみぞれが降りはじめ、やがてごく細粒の雪となる。やはり冬の京都を訪れるときは折りたたみ傘は必要である。龍馬が隠れた材木小屋跡も、彼を助けた薩摩藩の伏見屋敷跡も、今は石碑があるのみで、碑は淡雪に薄く覆われていたが、最後の見学先の、薩摩藩菩提寺である大黒寺には、「もう一つの寺田屋事件」の殉難者たちが弔われており、その頃には雪も上がった。本堂裏手の墓地前



大黒寺

列に、有馬新七ら「寺田屋殉難九烈士」の墓塔が横一列に並んでおり、墓碑銘は西郷隆盛が揮毫したものといわれる。庫裡には、幕末に西郷隆盛、大久保利通などの藩士たちが国事を論じたという部屋があり、彼らが実際使用していたという机や硯、筆の他、書や歌も展示されていた。こうして薩摩藩にゆかりの地を訪れ、「京の冬の旅」に協力する大学生の説明も聞いて、ますます西郷隆盛に興味をそそられ、その人物像に思いを馳せた。

原作によると、西郷隆盛(吉之助)が忠義を超越して絆をもった島津斉彬は、先見の人だったようだ。洋学思想に傾倒しシーボルトとも接点を持ち、早い時期から欧米の情報も得て、やがてやってくるだろう他国からの攻撃に備え、製鉄や造船に着手していた。そのため藩の財政は困窮し、庶民はおろか武士までも貧しい生活を強いられていた。しかし、琉球との貿易や奄美からの砂糖の専売制でかなりの利益を得ていったようで、痩せた土地でも栽培ができるさつま芋は、薩摩の人々の命をつないだ。そのさつま芋は、1605年、明への進貢船の総管(事務総長)であった野國(某)氏が中国の福建省から苗を持ち帰り、まず琉球で普及、その後、薩摩にもたらされたようだ。

それにしても西郷隆盛が人々の心をつかんで後々まで愛されているのは何故だろう。林真理子ならではの語り口で描かれている生涯で二度の流刑、奄美大島と徳之島・沖永良部島での暮らしの様子は新鮮である。一度目は潜居、二度目は重い禁固刑。苦しみを糧に西郷は自分を磨き復活を果す。島の嫁、愛加那との結婚生活では生きる喜びを感じ、島の人々との交流を密にし、子供たちへの教育を行い人々の信頼を得ている。

原作では、戦の天才でありながら人々の心に寄りそうことができる情の濃い部分をもつ人物として魅力的に描かれている。交渉相手の苦しい立場などを考慮できる人であり、主君であっても、必要とあれば意見する行動力もある人だったようだ。王政復古、廃藩置県と激

動の時代を経て、岩倉具視や大久保利通ほか約 100 名が海外視察の旅へ出かけてしまった。留守役として西郷は政府と天皇を託され、21 才の年若い天皇と共に九州西国巡幸に出かけた。その折、西郷は天皇に学んでいただくために多くのことを伝えたとされる。「琉球は長



く薩摩が治めてきたが生きるために清国とも深い交流があり二つの国には生まれ長く苦勞してきた。近く尚泰王が参内する折には寛大なる処遇を賜りますように」と助言している。天皇は、いつのまにか深い親愛をもって「西翁」と呼ぶようになったそうだ。

日本はわずかな間に、それほどの犠牲をはらうことなく明治維新という革命を成しとげた国として、欧米では評価されているらしい。

中央政界から身を引いて故郷で隠遁生活を送っていた西郷は「吉野開墾社」なる私学校を開く。「教育とは決してうらぎることのない事業だ」と。そんな西郷は不本意ながら「西南の役」にかりだされ、政府軍の圧倒的な総攻撃の中で敗退する。政府軍はもとより薩軍の中からも助命の動きがあったが、西郷は「もうここらでよか」「区切りにいる者は死ななくてはいかん」と言い自ら命を断った。なんと潔いことか。人々の心に残るはずである。ともあれ大河ドラマ上では来月、吉之助がようやく江戸に向かう。これからが楽しみである。

<報告 2月20日 : 田原由美子>